

こたえ 大工と鬼六

おにろく

大工と鬼六

おにろく

(日本の昔話)

昔、流れの速い川があり、何度橋をかけても、すぐに流されてしまいました。村の人は、うでのよい大工にたのみました。

大工がこまっていると、川から鬼があらわれました。

「おれが橋をかけてやろう。そのかわり、おまえの目玉をよこせ。」

次の日、りっぱな橋ができていました。目玉をとられたくない大

工がたのむと、鬼は言いました。

「おれの名前を当てたら、ゆるしてやろう。」

大工が山を歩いていると、子どもたちの歌が聞こえてきました。

「早く鬼六、目玉もってこい。」

次の日、大工が「鬼六。」とよぶと、鬼は川の中へ消えていきました。

1 村の人たちが大工にたのんだのは、どうしてですか。

何度橋をかけても、流されてしまうから。

2 鬼は、橋をかけるかわりに何をよこせと言いましたか。

大工の

目玉

3 鬼は、どうすればゆるしてやると言いましたか。

ア お金をはらう。

イ 鬼の名前を当てる。

ウ もう一つ橋をかける。

4 大工が、鬼の名前を知ることができたのはどうしてですか。

子どもたちの歌に、鬼の名前が出てきたから。